

2012 年度国際ワークショップ・公開講演会報告 公開講演会：「教室における学びとパフォーマンス」

日本発達心理学会 2012 年度国際研究交流委員長 小林 亮 (玉川大学)

日本発達心理学会は毎年、海外の著名な発達科学研究者を講師にお招きして国際ワークショップを開催しておりますが、それに合わせて一般の方々を対象とした公開講演会を行ってきました。2012 年度の国際ワークショップ (8 月 27 日～29 日, 大正大学) に合わせて開催された公開講演会は、講師にニューヨークのイーストサイド研究所 (East Side Institute for Group and Short Term Psychotherapy) 所長のロイス・ホルツマン (Dr. Lois Holzman) 先生をお迎えし、「教室における学びとパフォーマンス」というテーマで、2012 年 8 月 26 日 (日) の 15:00～18:00 にかけて、お茶の水女子大学の共通講義棟 2 号館 201 教室にて開催されました。受け入れ担当者は、茂呂雄二先生 (筑波大学) と香川秀太先生 (大正大学) です。この公開講演会は、共催機関としての (財) 発達科学研究教育センター (CODER) の助成金支援によって実現したものです。この場を借りまして、本学会の公開講演会に温かいご支援を下さった発達科学研究教育センターに厚く御礼申し上げます。またこの公開講演会は、日本臨床発達心理士会の共催により、臨床発達心理士の資格更新研修会 (1 ポイント) として認定されました。結果として、計 50 名の臨床発達心理士の先生方が、この公開講演会への参加により、資格更新ポイントを取得されましたことを申し添えておきます。公開講演会は英語で行われ、(株) サイマルの方に通訳をして頂きました。

今回講演を下さったホルツマン先生は、ヴィゴツキー理論に基づくソーシャルセラピーの指導者として世界的に知られている発達研究者です。今回の公開講演会で、ホルツマン先生はヴィゴツキーの発達理論の高度な理論的理解に基づきながらも、それをコミュニティ支援という観点から現場の発達臨床活動の実践にどう活かしていくかという理論と現場をつなぐ興味深い視点を提供して下さいました。また教室での教育活動を認知と感情さらに身体感覚が融合されたセラピーの場として捉える視点が提示されたことも興味深い成果でした。

今回の公開講演会には、合計で 201 名の参加がありました。このうち 37 名は、翌日から大正大学で開催された同じくホルツマン先生による 3 日間の国際ワークショップに参加した方々でした。発達理論と発達臨床現場の実践をつなぐ具体的な視点が提示されたこと、また教室での学びとセラピーをつなぐ論点が明確化されたこと、そして何よりもホルツマン先生のわかりやすく魅力的な語りとソーシャルセラピーの実践演習も交えた熱気あふれる双方向型のセッティングにより、今回の公開講演会は、非常に盛況で参加者の満足度も高いイベントとなりました。「学ぶこと」(learning) と「行為すること」(performing) の相互作用にこそ発達の本質があるというホルツマン先生のメッセージは、発達科学にさまざまな形で関わっている参加者の方々に大きな問と示唆を投げかけたと言えるでしょう。

2012 年度国際ワークショップ講師受け入れ担当委員：茂呂雄二（筑波大学）香川秀太（大正大学）

Lois Holzman 氏は、1970 年代に行った発達・学習の生態学的研究、その後 1980 年代からニューヨークの貧困地区で行ってきた発達臨床的支援ならびにその基礎となるヴィゴツキー理論の独自の解釈に明らかなように、発達心理学に対して多大な貢献を果たしてきた。

言語発達研究者 Lois Bloom のもとで言語発達心理学で学位を取得した後 (Columbia University), Michael Cole・Ray McDermott のもと Rockefeller 大学でポストドク研究を行った。このときヴィゴツキー派の発達理論を生態学的言語発達研究と融合させる形で研究を進め、発達心理学・学習研究でよく知られる、LD 児に関する一連の生態学的研究を発表している。その後、ヴィゴツキー派生態学的発達理論を応用しながら、長くニューヨークでの発達支援ならびに発達臨床実践者の育成に携わってきた。

なかでも、注目すべきは、ニューヨーク市ハーレム地区に Barbara Taylor School という実験学校を創設しての実践研究である。貧困、人種差別、エイズ等の様々な問題を抱える子どもたちを対象に、地域コミュニティーのリーダーになれるような人材育成を目指して実践的研究が行われた。この種の実践研究のバックボーンがヴィゴツキーの発達学習理論であり、さまざまな心の問題を社会的な状況と関連づける、コミュニティーの構築を目指す、Social Therapy とよばれる独特の社会的臨床活動である。きわめて高度な理論に裏打ちされた実践研究として高い評価が与えられている。

また、Holzman 氏は、このような実践的支援と研究を進める人材を育成するために、The East Side Institute を開設し、短期、長期の臨床指導のほか、様々なワークショップやカンフェランスを行い、精力的に発達臨床家の育成を進めている。

現在、日本社会でも子どもたちの発達を支援しようとする時、現実の様々な社会問題を考慮に入れざるをえないのが現状である。さまざまな新しい社会問題に対して、それを分析可能なメタ理論に基づいて、発達臨床支援をめざすことが重要である。そのような研究・支援の先駆者であるという意味で、Holzman 氏は、発達理論の面においても、実践についての実績という面からも、時宜を得た公開講演会、国際ワークショップとなった。

公開講演会：「教室における学びとパフォーマンス」

ロイス・ホルツマン (Lois Holzman)

【概要】

私は30年前に、Fred Newman という、哲学者であり劇作家、俳優、セラピスト、コミュニティビルダー、そして政治的リーダーでもある、たぐいまれな人物と出会った。ニューマンにヴィゴツキーを教えたことで、ソーシャルセラピーといわれる心理療法は、より実践的にラディカルでユニークなものとなった。30年の実践の中で、それはニューヨークや米国の枠を超えて広がり、多様な教育・文化状況でも応用可能な、人間の学習と発達の有効な方法論となった。

ヴィゴツキーの功績はいくつもあげることができようが、私は彼がいくつもの二元論を超えようとしたことに感銘を受ける。生物対文化、行動と意識、考えることと話すこと、学習と発達、個人と社会、こういった二元論を否定し、それに対抗しようとした。私たちは、この二元論否定を創造的に模倣する。とくに方法論に関する議論に関して、創造的模倣が必要だと思う。

ここで方法というのは、研究のテクニクではない。人間存在のユニークさを映し出すことができる、研究に必須の道具の議論である。いわゆる自然科学が与えるのは二元論的方法である。人間を科学的に扱うには非二元論的方法概念が必要である。ヴィゴツキーは以下のように述べている。

『方法の探求は、人間に固有な心理活動を理解するという取り組み全体において最も重要なものである。この場合、方法は前提であると同時に産物でもある。つまり研究の道具でもあり結果でもある。』

ヴィゴツキーが克服しようとしたのは、結果のための道具 (tool for results) という科学パラダイムである。このパラダイムは、人間固有のユニークな存在は明らかにできない、直線的、道具的、二元的方法概念である。

私たちが造語したのは、『結果も道具もアプローチ』(tool and result) である。道具は対象から遊離しておらず、道具と結果は、同時に生成され、それが連鎖して探求活動という、いまここの革新的な実践が展開する。

この講演では、この方法概念を採用して私たちが行ってきた30年におよぶ、セラピー、教育、仕事場でのセラピー実践を紹介しながら、さらにこの方法の意味を探求していく。

【講師紹介】



ロイス・ホルツマン先生は、コロンビア大学で学位取得（言語発達心理学）後に、1978年からロックフェラー大学でマイケル・コールらと行った生態学的認知研究で非常によく知られていますが、それ以来一貫して、ヴィゴツキー理論の高度な理論的理解に基づきながら、同時にそれを象牙の塔に閉じ込めることなく、街場のコミュニティービルディング活動を広げていく、実践的な発達臨床活動として研究を継続してきました。その

成果はたくさんの書籍と学術論文にアウトプットされてきました。

ホルツマン先生が所長を務める、East Side Institute for Group and Short Term Psychotherapy は、ニューヨークのマンハッタンのど真ん中にあります。政府・行政からの資金援助をうけず、賛同者の寄付とボランティアでまかなっている、まったくの独立系組織です。

この Institute は、さまざまな発達臨床のプロジェクトを展開しています。そのうちのひとつは All Stars Talent Show Network というものです。貧困地区のアフリカン・アメリカンの子どもたちを、Institute が保有する劇場のステージにあげることで、新しい未来に結びつく経験を提供しようとしています。また Performance of a Life Time というプロジェクトでは、遊び心に満ちた劇的パフォーマンスに基づくワークショップを企業にアウトリーチすることで、企業内の部局の人々の自己理解や人間関係理解を促すというものです。参加企業には、AIG やティファニーなども含まれています。これらのプロジェクトのいずれもが、ヴィゴツキーの考え方の拡張、つまり遊びの ZPD の中で大人の情動も開放されるという考え方に基づいています。

主な著作

Lois Holzman 2009. *Vygotsky at work and play*. London : Routledge.

Lois Holzman & Rafael Mendez 2003. *Psychological investigations : a clinician's guide to social therapy*. New York : Brunner-Routledge.

Lois Holzman and John R. Morss (eds.) 2000. *Postmodern psychologies, societal practice, and political life*. New York ; London : Routledge.

Lois Holzman 1997. *Schools for growth : radical alternatives to current educational models*. Mahwah, N.J.: L. Erlbaum Associates.

Fred Newman & Lois Holzman 1993. *Lev Vygotsky : revolutionary scientist*. London ; New York : Routledge.

関連サイト

<http://eastsideinstitute.org>

<http://www.allstars.org>

<http://www.socialtherapygroup.com>

<http://www.performingtheworld.org>

<http://www.performanceofalifetime.com>

<http://loisholzman.org>

講演抄訳

私の演題は、教室における学びとパフォーマンスです。私は、パフォーマンスすることと学習するという人間の行為は不可分にむすびついていると考えます。どういう経緯で、このような理解に至ったのか、私の研究の歴史とともに紹介します。皆さんのお役に立てば幸いです。

35 年前、私はよりよい世の中を作りたいと考えて、地域コミュニティーでの心理、教育、社会的セラピーに携わるようになりました。そのとき、仲間と活動を始めたのですが、何をしたくないかは分かっていたのですが、何をしたらいいかは十分には分かかっていませんでした。

絶対にやりたくないと考えていたのは、伝統的制度にあるような構造的な制約やバイアスを反復するような教育方法でした。抑圧的で発達のとは言えない、性差別、民族差別、貧困層への差別などを生み出す抑圧的なことは、絶対にしたくないと考えていました。そのときすでに計画されたり、議論を深めていた訳ではないのですが、それでも幾つか活動に移すことのできる価値観あるいは関心だけはもっていました。

第一の価値観は、正直に自分の信じることを実行するということでした。そのためには、独立を確保する必要でした。あらゆる大学、企業、財団などの組織から、財政的に独立することが必要でした。そこで私たちは、路上で、または各家庭を訪れて、新しい人間発達のプログラムを開始すると説明して、寄付を募りました。

第二の価値観は、孤立しないということでした。私自身は、アカデミーとの関係を継続しましたし、様々な研究分野からの学びとともに、私たちからの発信を継続しました。心理学、心理的セラピー、ソーシャワーク、哲学、教育、医学、若者の発達、演劇、創造的芸術、パフォーマンス研究に加えて、様々な視点、つまりシステム理論、活動理論、社会構成主義などと連携しました。

第三の価値は、常にオープンであることです。プロジェクトを始めたメンバーは、みな進歩的でラディカルな思想を持っていましたが、イデオロギー的に過度な決めつけは避けました。右から左まで多様な思想信条をもつ人々と対話し続けてきました。

第四の価値観は、世界的活動です。このグローバルな世界で、様々な国際的交流のサポートの他、世界中の様々な草の根活動家と協力していますし、彼らとの出会いを大切にしつつ同時に草根の組織同士の出会いをサポートしています。このような活動を世界的な規模で行ってきました。

発達学習観のシフト

過去数十年にわたって、数百のさまざまな組織の、数千の様々な年齢の人々と関わることで、学習と発達が文化的で創造的であるという方法論的発見が可能となりました。

本日、皆さんの考え方をシフトしていただきたいと願っています。とくにパフォーマンス的な考え方へのシフトです。このシフトによって、世界中の、多数の教育者、カウンセラー、コミュニティー活動家に、考え方を転換をもたらしています。このことは、このシフトが人間の学習と発達への新しいアプローチであること示しています。さらなる実践と理論化を続けていくべきアプローチと考えます。

私たちの根底にある考え方とは、人間は世界を知覚し、世界について思考するだけではなく、世界をパフォーマンスし実践するというものです。

つまり、生誕の瞬間から、私たちは成長をパフォーマンスします。まず、基本的ニーズを満たしてくれる養育者とともに成長のパフォーマンスを始めます。まもなく、家族全員、近所の人々、おもちゃ、ペット、テレビの登場人物そしてコンピュータとパフォーマンスします。

養育者は、空間を用意します。この空間のなかでは、養育者は乳幼児がまるで大人と同じようにパフォーマンスできるかのように、扱うことでパフォーマンス可能な空間がしつらえられます。2歳未満の乳児と接した時のことを思い起こしてください。おそらく、みなさんはその乳児と会話をしていたのではないのでしょうか？ 会話の間、大人は、その子がじつは言語を話すことができないこと、その子が大人の言語を理解できないことを知りながらですが、会話をパフォーマンスしていたはずで

す。乳児は、話すすべを知らないままに会話しています。知ることは、生後 12 ヶ月の乳児と父母、祖父母との交流には重要ではないのです。私たちは、乳児が大人の言語を理解する、そして大人も乳児を理解する、そういう振りをするのです。なぜなら、その子どももやがて話せるようになることを理解しているからです。

乳児と大人は、一緒に、言語を演じます。音声、イントネーション、微笑み、見つめあいを通じて、意味を創造し関係性を生成するのです。私の言語は、会話のパフォーマンスを再創造します。この過程で、新しい話者がパフォーマンスし始めます。

私は、このボブ・ディランの歌詞が非常に大好きです。

He not busy being born is busy dying. Bob Dylan

これは発達の可能性について論じた歌詞なのです。生まれることに忙しい人は、自分が誰であるかそして何ものかになることに忙しい人です。

例えば舞台でハムレットを演じている役者を思い浮かべてください。この役者は、自分自身でもあるし、同時に、ハムレットでもあります。喃語を話す赤ちゃんも、舞台の役者も、私たちみな、自分自身の新しいパフォーマンスを創造し続ける能力を持っています。これこそが、私の理解する人間の発達過程です。

この過程は、言い換えれば、社会文化的活動を通して人々が協同し、この協同によって世のなかを理解し変えていくことに関わる、創造性や可能性の過程です。私たちは新しいパフォーマンスを作り出し、発達する能力を持っているのですが、しかしながら私たちの所属する制度は、パフォーマンスを通じた発達を支援しないものなのです。そのような制度は私たちが鋳型にはめて行動を強制し、私

たちの生成、パフォーマンス、遊びを禁じるのです。

適応的に活動し存在するのも、パフォーマンスを通してですから、パフォーマンスし続けなければ成長も終わるということを描きなければなりません。私と同僚たちの研究、これは多くの人々が有益だと言ってくれていますが、これを皆さんと共有することで、新しい経験の見方と理解を得るのを助けたいと思います。

生成変化 (becoming) の過程を見ることは、つかの間のプロダクトを見ることでも、それが何かを見るものでもないのです。パフォーマーのアンサンブルとして自己ならびに他者を経験することは、環境への要因に対する個人の反応を見るのではないのです。

人は、存在を作りかえて、あらたなものを創造することが可能であるし、確かにそうしているのです。

このようなパフォーマンスへのシフトによって、総ての人々が、一生にわたる学習者になるのを支援することが可能になります。

パフォーマンスアプローチ：開拓の歴史

このように学習と発達がパフォーマンスであると、私と私の仲間が理解するようになったのはかなり偶然です。それはこんな出来事がきっかけです。フレッド・ニューマンという、哲学者であり、心理療法家であり、コミュニティービルダーだった彼は、ソーシャルセラピーと呼ばれるユニークな治療的アプローチを1970年代に創始しました。

その当時、彼は、仲間とともに、失業者組合の組織化にも携わっていました。私は、当時、発達言語心理学で博士号を取得したばかりでした。ソーシャルセラピーと失業者組合の両方の洗練された考えと政治性に魅了されました。両者は、実践力としても可能性の潜在力としても、エンパワリングなものでした。なにより両者は、既存の組合の制度そして心理療法の制度に潜む、基本前提に挑戦していました。そもそも、組合というものは、雇用されている労働者を前提としています。しかし、なんと彼が組織したのは失業者の組合です。セラピーの前提は、人は自己の内奥に至ることができれば、自己を知ることができるというものです。ところが、ニューマンが組織したソーシャルセラピーは、人々がグループとして新しい情動を創造するというものです。

私もニューマンも、それぞれ独立にですが、内的自己という考え方に疑問を抱いておりました。私の疑問は、言語と学習に関する社会文化的アプローチ、特にレフ・ヴィゴツキーのアプローチを学び魅了されたことがきっかけでした。それに、社会言語学者であり文化心理学者であるマイケル・コールのヴィゴツキーの理解、とりわけ、環境と人格は切り離せないという理解、そして孤立した人格はないという考え方に触れたことです。

一方、ニューマンの疑問は、科学と言語の哲学、とくにウィトゲンシュタインの考え方を学んだことがきっかけで始まりました。同時に、ニューマンは、プロやアマのための芝居を書き、劇を演出し、それをセラピーとして利用するというのを始めました。私たちは、ソーシャルセラピーをヴィゴツキー的な目で見るとははじめましたが、そのおかげで彼の著作の中に、多くの人が見逃してきたことを多数発見したのです。

ヴィゴツキー理解

世界中の人と同様に、わたしもヴィゴツキーについて、何が刺激的だったのか等、言いたいことは多数あるのですが、いまは二つのことを強調したいと思います。第一に学習と発達の関係、第二に遊びと発達の関係です。

ヴィゴツキーは、学習と発達は弁証法的ユニティー（統一体）であることを明確に述べています。彼は学習と呼べるものは唯一発達の学習だけだと述べています。学習は社会的に相互行為であり、共同的で、情動的で、認知的なものであり、人間の諸関係こそが人間の発達と学習の源泉であると同時にその実質だとしています。

In play a child always behaves beyond his average age, above his daily behavior; in play it is as though he were a head taller than himself.

Lev Vygotsky

彼は、遊びこそが、子どもの発達を先導する要因だと述べています。彼は、子どもたちが遊びの中では、平均的年齢の水準を超えた行為ができる、つまり頭一つ背伸びした人物、**Head Taller** として振る舞うことができると述べています。**Head Taller** となれるということが何を意味するのか考えることは、非常に魅惑的です。私の考えでは、**Head Taller** であることは、現在の自分でもあり、同時に生成し変化する未来の自分でもあるということです。お母さんごっこをしている、赤ちゃんは自分自身赤ちゃんでありながら、お母さんでもあります。喃語期の赤ちゃんがおばあちゃんとやり取りしているとき、その子は日本語を話さないと同時に、日本語話者でもあります。**Head Taller** である時、私たちは、やり方を知らないことをやるように励ましを受けます。パフォーマンスをするための舞台を作ることであり、パフォーマンスを実行するのです。ボブ・ディランが言うように、生まれることに忙しい (**being busy being born**) のです。赤ちゃんが演じパフォーマンスするのは、私たちの文化が **Head Taller** になることを支援し励ますからだということを、ニューマンと私はヴィゴツキーから学んだのです。ニューマンと私は、赤ちゃん以外の子どもや大人はどうなのかと問いました。みな誰でも、**Head Taller** として振る舞うことができるのかと問うたのです。すでに学校に通うような子ども、その家族、あるいは特権を奪われた貧困層、そして特権的な人々のために、遊びとパフォーマンスを再開するには何をすればいいのか？

回答は、**Head Taller** としてパフォーマンスできるような環境の創造に関わらせることだ、というものでした。ニューマンと私は、どうやるかわからなかったのですが、それを活動に移しました。数十人の仲間とともに、数千の人々を、発達とパフォーマンスが一体となった、発達のコミュニティ或はパフォーマンスするコミュニティに関われるようにしたのです。

私たちは、パフォーマンスすることは革命的な活動だ、パフォーマンスによって私たちは自らの生を創造しそして発達する、私たちと環境のユニティーを転換と変形を継続するのがパフォーマンスだ、と信じるようになりました。

Performance is, we have come to believe, the revolutionary activity by which human beings create their lives (develop) - qualitatively transforming and continuously reshaping the unity that is us-and-our environment.

Fred Newman & Lois Holzman

ヴィゴツキーの主張を私たちの言葉で言い換えると、こういう風になると考えます。ヴィゴツキーの言葉どおりではないのですが、これこそが彼が述べたこと、信じたことなのです。

学校の意味

ここで、教育、若者の発達の話題に転じたいと思います。日本の学校についてはよく存じませんが、多分以下のような特徴は、日米で共通して見いだされるでしょう。

学校は、ヴィゴツキーの言うところの発達の学習を支援する場所としてはふさわしくない場所です。学校では、学習の社会性が忘れ去られ、学習の情動性が閉ざされてしまい、発達は重要でなく、遊びは許されず、創造性は否定されてしまいます。

教育研究者の Ken Robinson が TED Talks で語った、大好きな言葉を引用しましょう。成長して創造性を得ることは無い、むしろ創造性をなくすために成長する。教育されることで創造性をうしなうのだ。

We don't grow *into* creativity; we grow *out* of it. Often we are educated out of it.

Sir Ken Robinson

ニューマンと私は、ロビンソン正しいと考えます。学校を発達の学習が可能な環境に転換するためには、学校にいる人々に対して、何をどうすればいいのか知らないことも実行できる人々としてあつかい、彼らが発達の学習環境を自ら創造できる人々だ、自らの学習と発達を創造できると想定することが必須なのです。

私たちの行った教育研究活動としての事例として、一つは12年間にわたって続けた実験学校による発達の学習環境の構築の事例があります。この事例では、この方法論で教師のトレーニングを行いました。もう一つは、若者プログラムの事例ですが、これはのちほど述べます。

実験学校では、4歳から14歳までの子どもたちと教師は、毎日、学習者として学校と授業をパフォーマンスしました。読書の時間をパフォーマンスする、科学を、数学を、他の教科も演じるのです。目的としたのは、何を学習するかではなく、子どもたちが良き学習者になることでした。この学校はヴィゴツキー理論に基づいた過激な学校として成功しましたが、時代に先んじていたためか、持続性を保てず1997年に廃校に追い込まれました。しかし、この実験学校での経験は、学校という枠を超えて、All Star Project という学校外の、より規模の大きい放課後プロジェクトに応用されました。

All Star Project

25 年前、当時関わっていた失業者組合のメンバーの母親が、子どもたちが何もやることがない、そのせいで麻薬に走ったり、ギャングになってしまうと相談にきました。そこで私たちは、子どもたちになにがしたいか聞いてみました。彼らにとって何がよいことか、何をやりたいかを理解しているという前提はもたずに質問しました。彼らは、タレントショーをやりたいと言いました。そこで、子どもを手伝って、タレントショーをかなりの回数開催してみました。

これは全員がオーディションに参加でき、全員がショーに出ることができます。競争ではないのです。今では、このタレントショーは、ニューヨーク市、ニューアーク市（ニュージャージー州）、シカゴ市、サンフランシスコ市にひろがり、2 万人以上の貧困層の若者が参加するようになっていました。そして、アフリカ、南米における若者に対するプログラムのモデルになっていますし、近い将来アジアでも応用されることを願っています。現在、All Star Project は、タレントショーばかりではなく、他の複数のプログラムを実践するようになっていました。総てのプログラムは、発達の学習者になるためのパフォーマンスアプローチに基づいています。スローガンは、舞台上で演じることができるのならば、人生もパフォーマンスできる、というものです。若者が夢を見なくなっているのですが、パフォーマンスを通して、さまざまな関係、新しい可能性、新しい夢を創造できるのです。可能性を夢見ることが、成長し続けるための鍵なのです。

模倣の意味

パフォーマンスへのシフトにおいて、最後に皆さんと共有したい要素は、模倣（振りをする、pretending）の概念であり活動です。All Star Project の創設者であるフレッド・ニューマンとレノラ・フラニーは、2 年前、Let's Pretend : So many educational crisis in America. という論文を書いています。ニューマンについては少しだけ紹介しましたが、フラニーは、発達心理学者で、政治的活動家です。また彼女は、アフリカ系米国人で女性初の大統領選挙候補者として全米 50 州を戦った人物として知られています。

この論文の中で、ニューマンとフラニーは、教育者や教育改良家の主張する、アチーブメントギャップに対して論争を挑んでおります。このギャップとは、中産階級と下層の間に、白人の子どもたちと黒人やラテン系等の有色人種の間に、成績のギャップがあるというものです。

二人は、学校の失敗に関して、自分自身でない何ものかになるという、人間固有の能力を涵養することで、成績不振者も成長への道を歩んでいる振りができる、と述べています。

Harnessing the uniquely human capacity to perform someone or something we are not, under-achieving kids can pretend their ways to growth.

Fred Newman & Lenora Fulani

赤ちゃんとやり取りする大人が、まるで赤ちゃんが話せるかのような振りをするので、赤ちゃんは話せるようになるのです。パフォーマンスへのシフト、子どもと大人が遊ぶことへのシフト、通常

の自分の行為を超えて **Head Taller** の振りをすることで成長の道を歩むことができる。このことは私にとって根本的に政治的な活動だと思えるのです。この活動は、現状に甘んじるのではなく、個人としての、文化としての、社会としての、そして世界全体としての成長の可能性を創造することなのです。

創造的不適応

1968年のスピーチの中で、キング牧師は、まさにこのことを述べていました。

There is need for a new organization in our world: the International Association for the Advancement of Creative Maladjustment, through which we will emerge from the bleak and desolate midnight of man's inhumanity to man into the bright and glittering daybreak of freedom and justice.

Martin Luther King, Jr.

これはワシントン市で行われたアメリカ心理学会の年次大会で、このスピーチをしたのです。後半では、自分が創造的不適応者であることを誇りに思うと述べています。私自身もまた、創造的不適応者であることを誇りに思っています。皆様の中に自分が創造的不適応者だと思う方がいましたら、そのことをぜひ誇りに思ってください。そうでない方は、その振りをしてください。

